2014年1月30日 発行

市史だより
Fukuoka

18
史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]
Autumn/Winter 2013
TAKE FREE

特集
北崎
西の古湊を巡る

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」● 連載コラム「福岡市史への歩み」
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

Special Feature

福岡市の西端、糸島半島北東部は主に花崗岩からなる丘陵が大部分を占めており、北から蒙古山・妙見山・灘山が並んでいます。この丘陵を挟んで西側の西区西浦、博多湾側の宮浦（唐泊）、そしてその南側の小田・草場の一帯は、古くは北崎とよばれ、現在でも小中学校名などにその名を残しています。博多湾の西北端に位置し、海とは切り離せない歴史をもつこの地域について、今回はみていきましょう。

行く船も来る船も、まずは北崎

天平八（七三六）年、筑紫館（鴻臚館）を出発した遣新羅使の一行が、韓亭（唐泊付近に比定）で歌を詠みました。この時ここに停泊して、すでに三日が経っていたといいます。

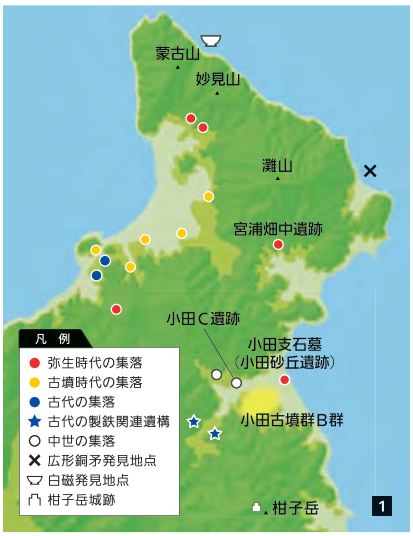
また永保二（一〇八二）年には、博多津を発った宋商人劉琨の船が北崎浦で風を待ちました。この船には、五台山を巡礼するために宋への密航をはかる戒覚が乗り込んでいました（『渡宋記』）。船底に潜み、トイレに行きたくならないように飲食を我慢したという戒覚にとって、出航までの時間は普段の何倍にも長く感じられたことでしょう。古くから北崎は、博多湾の外へ出る船が順風を心待ちにする場所だったようです。

その一方で、ここに到着する外国船もありました。『小右記』によると長元元（一〇二八）年、宋商人の周良史が北崎に着いています。彼は宋の出身ですが、母は日本人でした。この時は万寿三（一〇二六）年に宋に帰国して以来、二年ぶりの来航です。彼は貿易をめぐって、大宰大弐藤原惟憲とトラブルになりました。周良史の訴状によれば、惟憲が朝廷の指示と称し、船荷を取り上げたというのです。惟憲は、唐物と九州の品々を底を掃くように奪ったとして、当時「恥を忘るるに似たり」と揶揄された人物でした。

周良史の訴えだけを聞くと、惟憲が一方的に悪いようにみえます。しかし周良史は、宋では「日本国太宰府進奉使」と称して活動していました（『宋会要輯稿』）。また前回の来航時には、関白の藤原頼通から砂金三〇両を受け取るなど、朝廷にも取り入っています。実際のところこのトラブルは、協力して貿易活動にうまく立ち回ろうとした二人に行き違いが生まれたため、周良史が朝廷を抱き込んで惟憲に対抗したとみるべきなのでしょう。

このように博多湾の西北端に位置する北崎は、博多津に出入りする内外の船乗りたちがよく知る港でした。

ところで、小田の小高い山の上にある小田観音堂には、金色に輝く平安時代の千手



1 北崎の主な遺跡分布（明治33年の地形を基に作成）。宮浦畑中遺跡からは縄文土器、小田C遺跡からは旧石器時代の石器も出土している　2 唐泊沿岸から昭和37年に発見された広形銅矛（長さ 85.2cm）。弥生時代後期のものと考えられている。また、同地点からは碇石（時期不明）が発見された　3 西浦の海底から発見された12世紀の白磁碗。玄界島の海底でも中世の貿易陶磁が発見されており、当時北崎沿岸に外国船の行き来があったことがうかがえる　4 5 小田観音堂の千手観音菩薩立像と、観音堂のある山からみた小田地区と博多湾（いずれも撮影時期は不明）。海の向こうには、右に能古島、左に志賀島がみえる

アクセス

❶ 福岡市漁業協同組合 唐泊支所（福岡市西区宮浦273-12）
唐泊漁協ストアー
❷ 東林寺（福岡市西区宮浦359）
❸ 福寿寺（福岡市西区小田500）
※小田観音堂についてのお問い合わせはこちらまで
❹ 福岡市漁業協同組合 西浦支所（福岡市西区大字西浦1158）
恵比須神社（福岡市西区西浦）

6 筑前国志摩郡唐泊之図（江戸時代後期）　7 唐泊波戸築立之図。天保４（1833）年に築かれた全長約100ｍの波戸。この波戸は堅固であったが、蒸気船のような大船は波戸内には繋船できなかった　8 昭和30年代までに撮影された唐泊。現在のような港はまだ整備されておらず、埋め立ても進んでいない。丘陵部分には、昭和に入り開墾された畑があった　9 宮浦の高台にある東林禅寺の山門。能古島や西区小戸一帯などが一望できる。また境内には遣新羅使の歌を刻んだ万葉歌碑がある

観音菩薩立像（像高 二三四・二センチ）・十一面観音菩薩立像（像高 一七六・三センチ）・六臂観音菩薩立像（不空羂索観音菩薩カ、像高 一五一・五センチ）の三躯が安置されています。承和五（八三八）年に出発した遣唐使船では、海上で観音菩薩を描き、入唐僧の円仁らが読経して、航海の無事を念じたといいます（『入唐求法巡礼行記』）。船が行き交う博多湾の出入り口に安置されたこれらの三観音は、この地域で航海の安全を祈願する観音信仰がさかんだった時代を、今も静かに物語っているのかもしれません。

●大陸への窓口・禅宗寺院

中世になると、禅宗が僧侶の留学などを通じて大陸とさかんに交流するようになり、禅宗寺院が対外交流の窓口となりました。北崎には博多の承天寺の末寺が複数あり、これらもその役割を担っていたと考えられます。北崎周辺では中世の輸入陶磁器がみつかっていますが、禅宗寺院による大陸との交流によってもたらされたものである可能性もあるでしょう。

しかし、このような北崎の状況は徐々に変化していったようです。『筑前国続風土記拾遺』に収録されている「承天寺記録」によると、北崎に複数あった承天寺の末寺が、延享二（一七四五）年には小田の福寿寺を残すのみとなっています。戦国時代以降、対外交流の拠点は博多へ集中し、さらに江戸時代には長崎へと移っていきます。そのような状況のなかで、北崎もその姿を変えていったのでしょう。

●漂着する異国船

灘山が北西風を防ぐ唐泊は、江戸時代には五ヵ浦廻船の拠点として栄えました。唐泊は多くの廻船を抱え、江戸時代における流通の一端を担っていました。しかし廻船の拠点としてのみ機能していたわけではありません。

唐泊は江戸時代を通して、筑前内外の船の寄港地だったようです。慶安元（一六四八）年に二代藩主黒田忠之の乗る船が寄港、正徳四（一七一四）年には、長崎へ向かう番船が天候不順のため滞船しました。元治元（一八六四）年には、呼子を出た佐賀藩の船が風待ちのため滞船し、同日にはさらに唐津藩の船と薩摩藩の蒸気船が繋船しています。その翌年には、対馬へ向かう対馬藩田代領の諸士らが乗り込む住久丸も繋船しました。

また、唐泊には往来の船だけではなく、海外からの漂流船も入港しました。福岡藩領内の沿岸には、江戸時代を通して多数の漂流船が流れ着きました。藩領の西側に流れ着いた漂流船の多くは、一度唐泊に繋船されました。唐泊への漂流船の入港は、『黒田家譜』に記されているだけでも一一件を数えます。

寛永十七（一六四〇）年に設置された西浦

特集

北崎 ―西の古湊を巡る―

の番所は、のちに玄界島へ移設となり、玄界島沖へ流れ着いた漂流船は、番所で発見次第唐泊へ誘導・繋船されました。漂流船は単に繋船されるだけでなく、通訳の役人が派遣され、国籍や素性を確認した上で食料や薪水が与えられ、役人付き添いのもと長崎へ送られました。こうした丁寧な措置がとられたのは、漂流を装い、海上で日本船と沖買とよばれる密貿易を行う船もいたからです。

●西浦の漁業

唐泊と灘山を挟んで西にある西浦は、唐泊と同じく鯛網・鰯網・カナギ網での漁を行っていました。唐泊とは西浦岬で漁場が接しており、時に漁場を巡って争いがあったようで、元文三（一七三八）年以降は、入会または互いに金銭を払うことで漁を行うことになりました。

元文二年に始められた鯛漁は特に有名で、西浦でとれた鯛は安永二（一七七三）年以降、藩への献上品となりました。寛政六（一七九四）年には九代藩主黒田斉隆が西浦に立ち寄り、鯛漁を見物しています。

宮浦村の津上悦五郎が著した『見聞略記』には、鰯・カナギ・イルカ・鯨など多くの漁の様子が記されています。なかでも安政三（一八五六）年は豊漁の年であったようで、特に西浦は鰯が大漁でおおいに賑わったとあります。また十二月初めに行われたカナギ漁は、一艘につき五、六〇盃ずつも取れ、それらはすべて煎干に加工され、一盃が六〇〇文で売れたとあります。

●港を整備する

明治に入っても西浦の収入は漁業がその大部分を占めていましたが、肝心の港の整備はなかなか進みませんでした。それには西浦の港が北に向かって開けており、北風による荒波の影響を受けやすかったことが関係しています。

明治三十九（一九〇六）年には防波堤が築造されますが、これは短期間で崩壊してしまいます。その後、明治四十二年に再度大工事が行われ（翌年に完成）、ようやく船の出入りが容易となりました。

昭和になるとフグ延縄漁が始まり、当初は近海での操業でしたが、のちには五島沖まで進出していきました。しかし当時の西浦の港には、まだ遠方に出漁できる漁船を繋留するほど、十分な設備は整っていませんでした。そこで、当時の漁師たちは隣の唐泊に漁船を繋留し、西浦から漁具などを担いで、港と港を往復していたといいます。

10

11

12

13

14

15

10 昭和40年代の鰯網漁の様子。西浦では4月～12月にかけて、ごち網漁や一本釣り漁がさかんに行われている
11 昭和40年代の西浦の漁の様子　12 昭和40年代の西浦。現在では家々も建て替わり、風景は一変している
13 かつて西浦の漁師たちは、お櫃にご飯を詰めた弁当を持参して漁に出たという。正面の建物は現在地に移る前の西浦漁協、右の鳥居は恵比須神社
14 かつての西浦漁港の集荷場
15 北崎の農業は畑作が中心で、大正末期から昭和初期にかけ大根、白菜、西瓜などの野菜栽培が始まった。車力やリヤカーでの歩き売りだけでなく、宮浦からは船を使って福岡の都市部へと農作物を運び、商いをしたという。写真はその足となった「栄久丸」。このような近郊農業による福岡市部とのつながりは、福岡市との合併理由の一つと考えられている

このような状態を打開するためにも、西浦では港整備への要望が高まり、昭和七（一九三二）年から二ヵ年計画の船溜修築事業の予算を獲得して工事を始めました。しかし、翌年の暴風雨によって計画は早くも頓挫してしまいます。それでも地元では工事再開の働きかけを続け、再度修築工事が行われることになりました。この工事は昭和十年にようやく完工を迎えます。

● 救難所と浜の正月祭り

このように風波の厳しい海では難破する船も多く、西浦の漁師が救助にあたることもたびたびありました。このため明治二十三年、西浦に水防救護組（現 福岡県水難救済会西浦救難所）が組織され、難破船の救助や不審船の監視などの業務にあたるようになります。また明治二十四年に漁業法が制定されると、その翌年には西浦にも漁業組合が設立されました。

ところで水防救護組は独身の若い漁師で構成されたため、海難救助のほかにも村の祭事の中心的存在になるなど、西浦浜部の青年組織として機能しました。その一つが十日恵比須大祭です。これは一月十日、くじ引きで決まった十六歳の新入り四人が二組の夫婦恵比須に扮して、浜部の家を一軒ずつ巡るという祭りです。曳物・山車・囃子などを引き連れた恵比須は、玄関先でお潮井を振ると、家人に鯛を一切れ渡して祝い歌を歌いました。戦前には博多祇園山笠の人形を借りて山笠が出ていたこともあるようです。浜をあげての盛大な正月祭りだったのでしょう。

昭和後期に入ると全国的に漁業が不振になり、西浦でも漁師人口や後継者が減少していきました。世相を反映してか、十日恵比須大祭はこの頃に簡略化され、恵比須たちが家々を巡ることはなくなりました。しかし現在でも一月十日には漁港の恵比須神社で祭典が行われ、地元の若い漁業関係者が昔と同様、夫婦恵比須に扮しています。一年の豊漁・航海安全を祈願するとともに、地域の行事を受け継ぎ、正月を賑わそうという人々の気概が伝わってきます。

16 西浦十日恵比須大祭の様子（2014年1月10日）。夫婦恵比須（左：男恵比須、右：女恵比須）と参列者で西浦流の「祝いめでた」を歌う

東公園パノラマ館ジオラマ館と画家 矢田一嘯

明治四十三（一九一〇）年の春、東公園の日蓮上人銅像の約一〇〇メートル北東側に、銅像建設に尽力した佐野前励師の唱道によって、パノラマ館とジオラマ館ができた。正面入口から入って暗い通路を抜けると、そこは幅約九メートル、奥行き約一八メートルの長方形をしたジオラマ館。その側壁三面には、縦約二・七メートル、横約三・六メートルの、日本武将と元軍との熾烈な戦闘場面が迫力いっぱいに描かれた「元寇大油絵」一〇面が展示された。続いて隣接する東西約二五メートル、南北約二二メートルの楕円筒形をしたパノラマ館の中央階段を上がると、そこは旗艦三笠の甲板上にいるような錯覚に陥る。目の前には縦約九メートル、横約七五メートルの「日本海海戦の図」の大画面がぐるりと広がり、東側には波濤踊らす日本艦隊、そして西側には黒煙漲るバルチック艦隊とが海戦を繰り広げている。なお、パノラマ館は翌年十月からは蒙古襲来の図へと改作され、元寇パノラマ館とよばれた。

この二つの大画面を描いたのが矢田一嘯（一八五九～一九一三）。一嘯は横浜に生まれ、十五歳で日本画を学び、二十五歳でサンフランシスコに渡って、かつて日本の工部美術学校の教師をしていたカッペレッティに洋画を学んだという。帰国して明治二十三年に開館した東京・上野パノラマ館の「奥州白川大戦争図」を描いて評判を得、ついで熊本の九州パノラマ館で「西南戦争」を描いたとき、元福岡警察署長の湯地丈雄の元寇紀念碑（亀山上皇銅像）建設運動に賛同し、募金講演会のために元寇の大油絵を制作した。二十七年頃には福岡に移住し、湯地に協力する傍ら、博多人形師に着色技術や近代的表現技法等を指導、若い画家に洋画を教え、博多の実業家たちには英語を教示、さらに四十三年には市内の画家水上泰生や福岡医科大学（現 九州大学医学部）の中山森彦教授らと「五月会」を結成。新古書画や古器物等を品評するなどのサロン的活動を行うなど、明治後半期の博多の文化形成に大きく貢献した。

▲ 絵葉書「東公園元寇記念パノラマ館（福岡百景）」

第9回福岡市史講演会「遺跡からみた自然災害と福岡」を開催しました

10月12日（土）に福岡市博物館講堂において第9回福岡市史講演会を開催しました。

今回は平成25年刊行の『特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』に関連し「遺跡からみた自然災害と福岡」をテーマとして、岡村眞先生、寒川旭先生、磯望先生を講師としてお招きした3本の講演と、宮本一夫先生の司会進行のもと、シンポジウムを行いました。

岡村先生には「警固（けご）断層ならびに南海トラフ巨大地震の歴史からこれからを考える」という題で、断層の地理的特徴と人々の関わりや、海底などの水中の地質調査によって明らかとなった、近い将来起こるといわれている南海トラフ巨大地震の過去の活動痕跡などについてお話しいただきました。

寒川先生には「地震考古学への招待」と題し、地震考古学によって近年解明されてきた、過去の巨大地震の痕跡について、自筆のイラストを交えてお話しいただきました。一定の活動周期をもち、一つのシリーズともいえる巨大地震のまとまりが存在する可能性を提示されました。

最後に、磯先生に「遺跡分布からみた福岡の環境変化と災害」についてご講演いただきました。福岡の地形の成り立ちと災害について、地球全体の大きな動きのなかでとらえ、想像力をもって自然災害に備えることの重要性についてお話しいただきました。

岡村 眞 先生
（おかむら・まこと）
高知大学特任教授

寒川 旭 先生
（さんがわ・あきら）
産業技術総合研究所
客員研究員

磯 望 先生
（いそ・のぞみ）
西南学院大学教授／
福岡市史編集委員会
考古専門部会 専門委員

宮本 一夫 先生
（みやもと・かずお）
九州大学大学院教授／
福岡市史編集委員会編集委員

シンポジウム「福岡の遺跡と環境変動・自然災害」では、まず宮本先生から福岡の先史時代から現代に至る遺跡分布と自然災害の痕跡について解説いただきました。

続いて、福岡市民にとって大変身近な警固断層の活動周期や遺跡にみられる災害の痕跡、災害と気象条件の関わりなど、自然災害を経て形成された地形と共存してきた人々の歴史からみえる「備え」について、活発な意見交換がなされました。

福岡県西方沖地震や東日本大震災を経て、市民のみなさんの災害への関心が高まるなかで、過去の災害の歴史を遺跡から学ぶという歴史・遺跡への新たな視点を得るとともに、それらを備えとして現在・未来に活かすことの重要性を再認識する講演会となりました。

お知らせ

新刊が発売になりました

特別編　福岡城 ―築城から現代まで―

A4判／340頁（オールカラー）
上製本　頒価：2,500円（税込）

黒田長政が約四百年前に築いた福岡城の、築城から現代までの歴史を時代を追って明らかにし、城内に存在した諸施設の変遷を詳細にたどることによって、福岡城の全貌に迫る。

特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史

A4判／470頁（オールカラー）
上製本　頒価：3,000円（税込）

遺跡と環境変動から福岡の街の成り立ちを考え、考古学、歴史学、自然地理学、植生史の成果を結集して、福岡の歴史を先史から現代まで語るとともに、福岡の未来を探る。

電話申込み・店頭販売

- **福岡市博物館ミュージアムショップ**
  福岡市早良区百道浜3丁目1-1
  電話：092-823-2800

店頭販売

- **福岡市情報プラザ**（福岡市役所1階）
  福岡市中央区天神1-8-1
  電話：092-733-5333
- **ジュンク堂書店 福岡店**
  福岡市中央区天神1-10-13
  電話：092-738-3322

お問い合わせ

- **福岡市博物館 市史編さん室**
  福岡市早良区百道浜3丁目1-1
  電話：092-845-5245

考古

福岡市内の遺跡というと、板付遺跡や吉武高木遺跡など弥生時代のものが有名ですが、大原D遺跡（縄文時代）や鴻臚館跡（古代）、元寇防塁（中世）など、各時代の遺跡が市全体に分布しています。このような遺跡からは、大陸との玄関口として機能し、発展した市域の姿をうかがうことができます。

平成二十八年刊行の『資料編 考古1』では、福岡市西部地域に所在する遺跡を紹介します。旧石器時代から近世に至るまで、すでに知られている重要な遺跡や遺物はもちろん、これまであまり広く知られることのなかった遺跡や遺物についても掲載する予定です。

古代

國學院大學図書館・横浜市立大学学術情報センターのご厚意により、古文書の原本調査を行いました。いずれも、古代の筑前国を知るためには重要な観世音寺文書です。特に國學院大學図書館所蔵「筑前国観世音寺封荘作田地子段米注進状」は早くに活字化され、内容はよく知られた古文書ですが、その後所在が明らかになっていなかったものです。近年、同館に所蔵されていることがわかり、このたび詳細な観察と、それに基づく正確な校訂が可能となりました。これらの調査に基づき、『資料編 古代』には最良の書き起こしと、最新の解題を掲載する予定です。

中世

文書にはさまざまな作法がありますが、それは中世でも同様です。特に発給者の署名や宛名の位置や高さには、今日以上に大きな意味がありました。

資料集に古文書を収録する際も、その点に注意しなければなりませんが、古文書の形そのままに掲載することは、紙幅の問題もあり、残念ながら不可能です。どうしても決まったレイアウトにせざるを得ませんが、文書の意味を忠実に伝えようとすれば、やはり何とかしたいもの。現在編集作業中の『資料編 中世2』でも、署名の位置を少しでもずらすなど、何とか当時の姿を伝えられるように可能な限りの調整を試みています。

近世

今回も『資料編 近世2』の内容をご紹介します。『資料編 近世2』は四章構成になりますが、その内の一つ「日々の記録」という章では、家臣の日記を掲載します。家老から下層家臣まで各階層の藩士が記した天保四（一八三三）年のものを集めました。同じ年に、違う人物によって書かれた日記を一冊の本で並べてみる機会はあまりないと思います。これらの日記は書き手が違いますので、当然ながら記されている記事が異なります。

本格的な改革の開始を翌年に控えた天保四年、複数の日記をみていくことで一つの日記ではなかなかみえてこない福岡藩の姿を垣間みることができるかも知れません。

近現代

前号に引き続き、『特別編 近代福岡の文化とメディア（仮）』（平成二十八年刊行）の編集についてご紹介します。書名を「近代福岡の印刷と出版（仮）」に変更して、近代福岡の出版文化を全面的に取り上げることになりました。各章は明治期、大正期、昭和初期、戦前戦中期、戦後占領期、高度経済成長期の時代ごととして、レイアウトは見開き二ページ単位で概要、トピック、コラムなどを構成する、ビジュアル重視の編集を進めていきます。重要になってくるのは、刊行物のリストおよびそれらの刊行物の書影です。これらは膨大な量になると思われ、それらデータの取り扱いが今後の課題です。

民俗

民俗専門部会の主たる調査方法は聞き書きです。地域のこと、仕事のこと、家のこと、昔の暮らしや現在に至る変化のこと、それらを語ってくださる話者の方々なくして民俗編は成り立ちません。調査者と話者との出会い方はさまざまで、伝手をたどって紹介いただいたり、お話を聞かせてくださいと直接お願いしたり、たまたまそこにいた方と世間話を始めたことがきっかけだったりします。幸いなことに初対面の調査者にも快くご協力くださる方も多く、聞き書き調査は福岡の人々の懐の深さに触れる機会でもあります。

そのようにして集積してきた人々のお話の一端は、平成二十七年刊行の『民俗編二 ひとと人々』でお目にかける予定です。現在、鋭意執筆作業中です。

SF Columun

福岡市史への歩み

volume 17

文＝田坂大藏（福岡市博物館研究指導員）
Text : Daizo TASAKA

昭和40年代後半になると、行政のなかにも歴史資料の重要性について幅広く考え、市民へのアピールを志向するような動きがみえてきました。それは、元寇防塁（げんこうぼうるい）跡の発掘調査にともない、文献史学的な考察も並行して進め、きちんとした「史料集」を福岡市教育委員会が出版したことからみて取れると先回報告しました。

その後、昭和47（1972）年に福岡市が政令指定都市へ昇格したことにともなって、翌年には福岡市文化財保護条例が制定され、文化財保護行政を福岡市独自で推進する体制が作られると、さっそく福岡市内の「文化財資料調査」が始まりました。急激な都市開発にともなって埋蔵文化財調査の件数はうなぎ上りに増加し、それに対応するため調査人員の増加も含め、調査体制が整備されていきました。なかでも特筆すべきは、発掘調査と並行して調査地域の文献史料収集も行われるようになったことです。埋蔵文化財もたんに考古学的調査だけでなく、より総合的な歴史的位置づけを志向するようになり、市域に関する古文書・古記録の収集整理の必要性が日増しに高まっていたのです。しかしながら、当時はまだ、昭和31年に始まった明治時代以降の福岡市の歩みを対象とした福岡市史編さん事業が継続中ということもあり、原始から近現代までを網羅した本格的な市史編さんのきっかけはつかめませんでした。

だからといって、文化財関係者が手をこまぬいていたわけではありません。現場から福岡市域に関する古文書・古記録類の調査研究の必要性を訴えるとともに、行政の上層部にそれを理解してもらうため、権威のある複数の歴史研究者に発言してもらうという手段を講じました。機会をとらえ、直接対話してもらうというゲリラ戦法ともいうべきもので、筆者も実際にこうした「戦法」を何度も目撃しました。

そうした一連の働きかけのなかで、行政の上層部は「地域の歴史」を誰にでも、よりわかりやすく、平易に理解できるスタイルにすることが望ましいと考えていることがわかってきました。具体的には、大手出版社がさまざまなシリーズを出していた学習漫画にならって「まんが 福岡市の歴史」のようなものを出版するという案でした。

自治体史を「漫画」でという発想は筆者には思いもよらぬことでしたが、平易な自治体史をといわれてみると一考しないわけにはいきません。福岡市のように重層的な歴史がある都市の歴史を、漫画化することの無謀さを説いて、ひとまずこの考え方は納めてもらいましたが、こののち漫画化という発想は筆者が思っていたよりずっと根強かったことに気づかされました。その件は次回で述べます。

参考文献

- 井形進「小田観音堂の三躯の観音立像」（『九州歴史資料館研究論集』33号、2008年）
- 北崎村々誌編纂委員会編『北崎村誌』（北崎村役場、1961年）
- 筑豊水産組合編『大典記念 筑豊沿海志』（筑豊水産組合、1917年）
- 福岡県筑前海沿岸漁業振興協会編『福岡市漁村史』（福岡市漁業協同組合、1998年）
- 福岡市教育委員会編『小田C遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第656集（福岡市教育委員会、2000年）
- 福岡市史編集委員会編『新修 福岡市史 特別編 福の民』（福岡市、2010年）
- 福岡市立北崎小学校百年誌編集委員会編『北崎小学校百年誌』（福岡市立北崎小学校、1980年）
- 渡邊誠『平安時代貿易管理制度史の研究』（思文閣出版、2012年）
- 『弘法大師帰朝1200年記念特別展 空海と九州のみほとけ』（福岡市博物館、2006年）

資料所蔵

- 北崎公民館【P2 ④・⑤／P3 ⑧／P4 ⑭・⑮】
- 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室【P2 ②】
- 市史編さん室【表紙／P3 ⑨／P5 ⑯／表紙の写真】
- 福岡市漁業協同組合唐泊支所【P3 ⑥・⑦】
- 福岡市漁業協同組合西浦支所【P4 ⑩・⑪・⑫・⑬】
- 福岡市博物館【P5 歴史万華鏡】
- 松田好喜 氏（福岡市博物館寄託）【P2 ③】

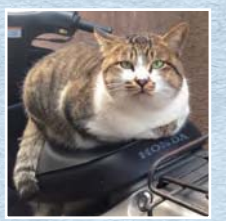
写真撮影

- 今井寛 氏【P4 ⑩・⑪・⑫・⑬】
- 藤野龍助 氏【P4 ⑮】

協　力

- 瀬戸英男 氏（福岡市漁協西浦支所会長）
- 北崎公民館　● 福寿寺

表紙の写真　宮浦　路地から覗く海



北崎には西浦と唐泊という二つの港があり、周辺の地域もそれぞれに特徴をもっています。西浦は、特集でも触れたように、今でも多くの祭りや風習が残されていて（特集ページの右肩に鎮座するハチマキの大漁達磨は、西浦の恵比須神社に奉納されたものです）、十日恵比須大祭のほかにも、市の無形民俗文化財に指定されている８月のかずら引きなどが有名です。近年、恵比須牡蠣が有名な唐泊は、漁港のすぐ近くに住宅が迫り、家々は密集していて細い路地が入り組んでいます。路地は進むにつれて上り坂になり、両側が高い壁に囲まれ視野は狭まりますが、ふと振り返ると、その隙間からは時折海が覗き、唐泊の波戸や、海の向こうには西区小戸の一帯と思われる建物群がみえてきます。恐らく普段は地元の方しか通らないであろうこの路地を、取材のためいくども往復しました。そしてこの周辺は、港町らしく多くの猫に出会える猫町でもあります。取材中もそのカワイイ姿に何度も目を奪われて、思わず足を止めシャッターを切りました。

福岡市史についての最新情報は、公式ホームページにてご案内しています ► http://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/

編集／発行 福岡市博物館 市史編さん室
814-0001 福岡市早良区百道浜3-1-1／TEL:092(845)5245／FAX:092(845)5019

TAKE FREE